第１回京都大学東北復興支援学生ボランティア事業に参加して

北白川試験地　紺野絡[1)]・藤井弘明[2)]

１．はじめに

平成23年3月11日(金) 太平洋三陸沖を震源とする大地震により、東日本大震災が発生した。この震災により京大フィールド研社会連携教授畠山重篤氏が運営する、水山養殖場（NPO法人森は海の恋人）も被災した。フィールド研では水山養殖場のある気仙沼西舞根の復興のため、ひいては東北地方の復興のために学生ボランティアを募集して、「森里海連環学に基づく東北復興のための学生ボランティア事業」を始めた。ここではその第１回ボランティアについて報告する。なお、今回のボランティアの受け入れ先として、NPO法人森は海の恋人の協力を得た。

１．日　程：平成23年8月26日(金)～8月30日(火)
２．現　地：水山養殖場（宮城県気仙沼市唐桑町西舞根133-1）
３．内　容：労働ボランティア（杉の間伐、山出し、カキ養殖筏の組み立て、流域清掃など）
４．宿泊先：ひこばえの森交流センター（岩手県一関市室根町山越字古沢94-7）
５．参加者：ボランティア学生21名、教員１名、農学研究科事務職員１名、技術職員２名

２．１日目（８月26日）

6時30分京大時計台前広場集合（荷物の積み込み）。7時00分京大正門前を大型バスで出発。京都東IC・名神・北陸・磐越・東北高速道路を通って、宿泊所ひこばえの森交流センター着は21時30分であった。

図１　移動用の大型バス

図２　荷物の積み込み

３．２日目（８月27日）

午前中は畠山氏の活動「森は海の恋人」の原点である、気仙沼湾に注ぎ込む大川流域の室根山に広葉樹70本の植栽を行った。参加者は慣れない鍬を手に作業に従事した。植栽終了後、水山養殖場のある唐桑町西舞根にマイクロバスで移動した。

午後は、カキ養殖筏制作のために伐採してあった丸太の山出し作業（人力）を学生が行い、追加の筏材伐採作業を技術職員２名が行った（伐採現場は別の場所）。

---

1) 現：芦生研究林・2) 現：上賀茂試験地

図３　植栽の様子

図４　植栽の様子

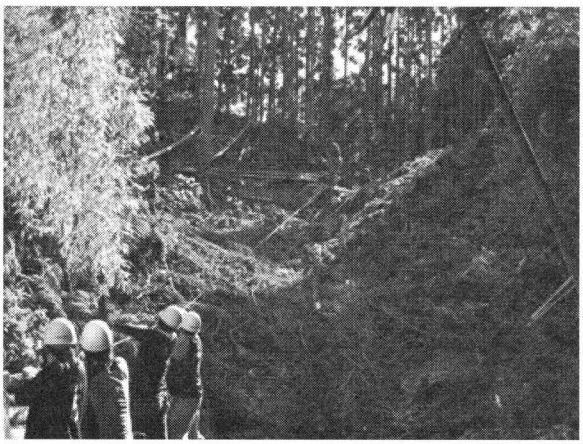

図５　人力山出し（ロープで引っ張り出す）

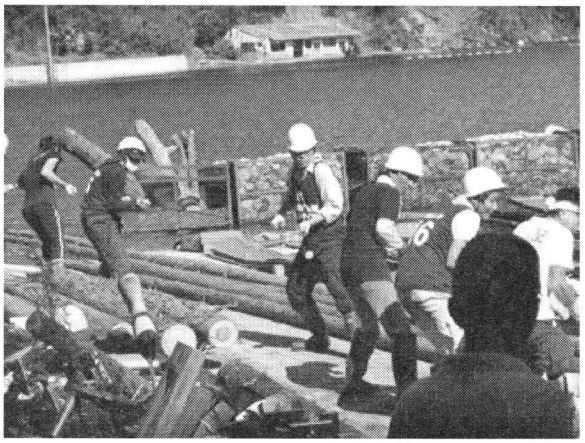

図６ 人力山出し

４．３日目（８月28日）

３日目の午前中は前日山出しした丸太を使ってカキ養殖筏の制作を行った。今回は18m×12mの大きさの筏が出来上がった。出来上がった筏は潮が満ちてきた頃合いを見計らって、海へ進水し係留された。

午後からは水山養殖場対岸にある、(財)カキ研究所三ノ浜分室（被害を受け閉鎖　畠山氏が

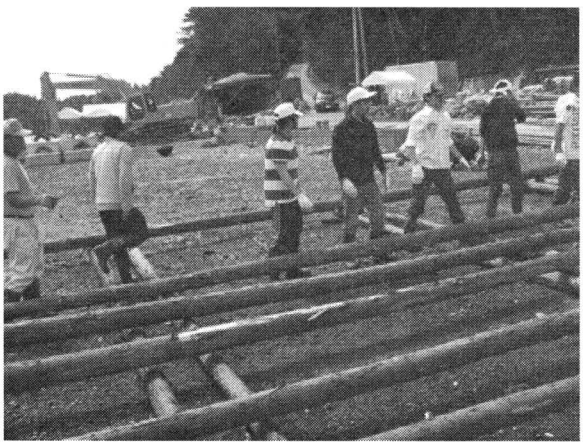

図７　養殖筏の制作（材を並べる）

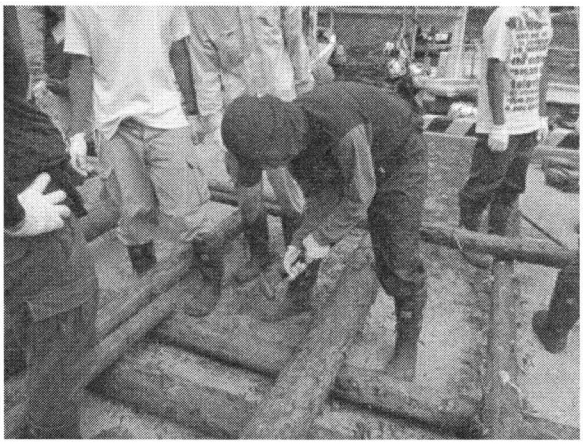

図８　養殖筏の制作（釘打ち）

買い取り予定）のガレキ撤去を行った。建物の中は津波の被害でガレキが散乱しており、この撤去にはかなりの労力が必要だった。技術職員２名は昨日と同じ現場で伐採作業を行った。

図９　(財)カキ研究所三ノ浜分室

図 10　室内は津波でひどい状態

図 11　ガレキを室外へ運び出す

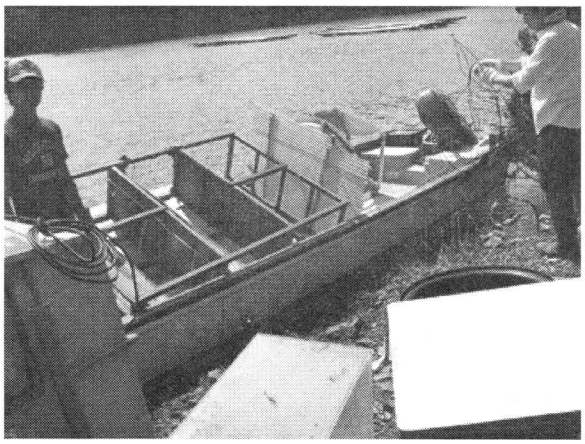

図 12　ガレキを廃棄するため船に積み込む

５．４日目（８月 29 日）

この日の午前中は、前日に引き続きカキ研究所のガレキの撤去を行った。参加者の奮闘もあって、建物内は撤去が進み整理されてきた。技術職員は午前中、伐採作業に従事した。

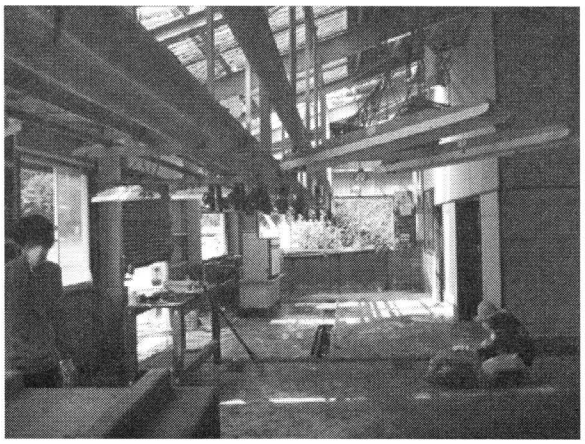

図 13　ガレキ撤去後

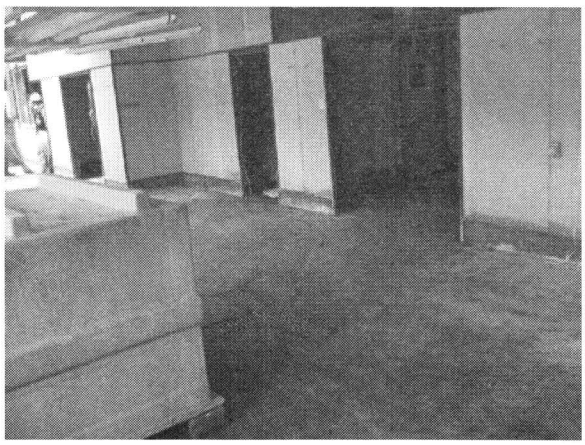

図 14　整理された建物内

午後からは全員でカキ養殖の作業を実際に行った。カキ養殖はカキの種が付着した原盤(帆立貝の貝殻)をロープの間に挟み込み（縄付け)、それを沖のカキ筏に吊して（本垂下）育てるものである。縄付け後はあらかじめ出来上がっていた新しい筏まで行き、本垂下作業を行った。

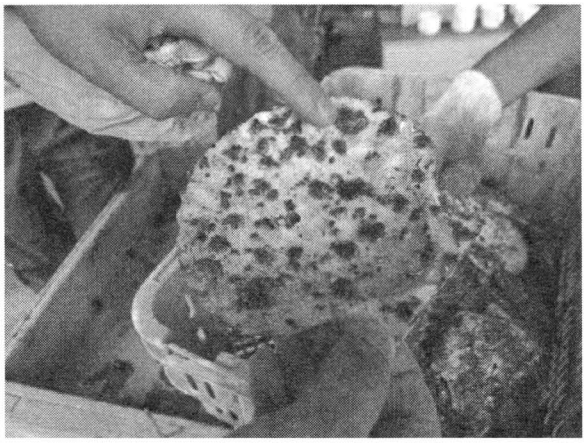

図 15　種カキが付着した原盤

図 16　原盤をロープに挟み込む(縄付け)

図 17　筏からロープを吊す(本垂下)

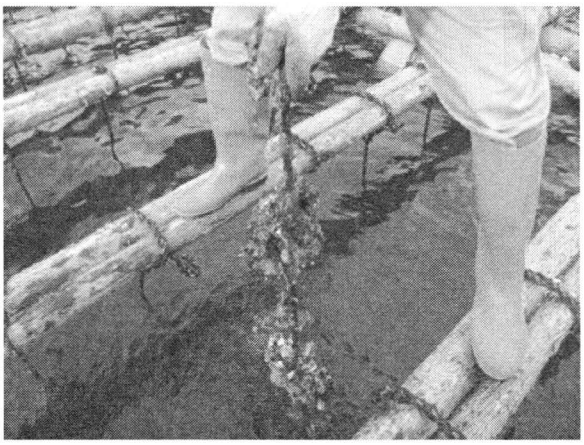

図 18　1 年経過した原盤(被害を免れた筏)

これで 3 日間の労働ボランティアの日程が終了した。

6．5日目（8月30日）

7 時 15 分に宿泊先のひこばえの森交流センターを出発。往路と同じ行程を大型バスで移動。21 時 15 分京都大学正門前着、解散となった。往路、復路共に 14 時間以上の移動時間で、バスのメーターでは片道 1,050km であった。

7．まとめと感想

3 日間の労働ボランティアであったが、内容が濃く充実した活動が出来たと思う。ボランティア第 1 回目と言う事もあり、手探りの状況の中としては当初の目的は達成できたと思われる。なにより、暑い気候条件の下、普段経験する事の無い作業の中でケガも無く、大きな体調不良が 1 人も出なかった事は 1 番の成果だと考える。また、実際に参加した学生の作業への熱心な取り組みを見て、京大学生のこの震災に対する想いの一端を見た事は有意義であった。

ただ、日程が土、日、月になり現地の人たちの休日を奪う形になってしまったことは反省点と考える。次回以降の日程には注意する必要があると思う。また、移動時間、宿泊環境等も改善が必要と思われる。移動時間は交通手段の関係上やむを得ないところであるが、宿泊については、今回は正規の宿泊施設では無い事と、他の宿泊者も滞在しており施設のキャパシティーを超えていた。

このボランティアが今後も継続していき、水山養殖場だけではなく、西舞根、気仙沼、ひいては東北地方全体のボランティアに発展していくことを切に願う。

8．震災の傷跡を写真で振り返る（当時）

西舞根

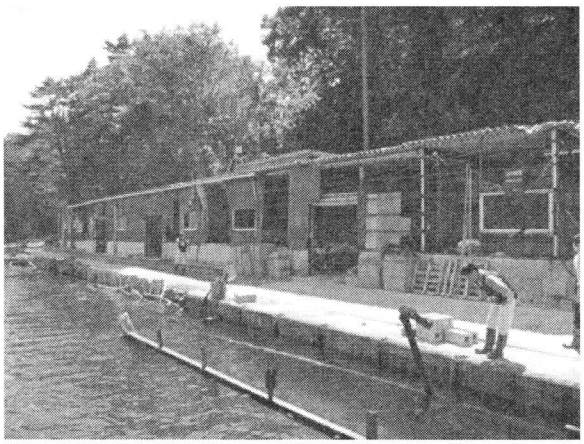

図 19　水山養殖場の作業所

図 20　倒壊した住宅

図 21　全壊した住宅

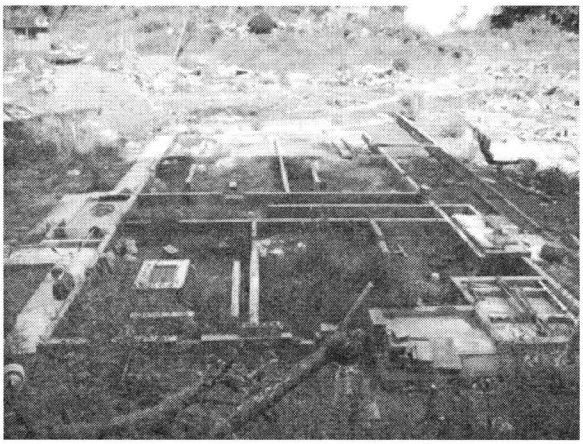

図 22　基礎だけが残された住宅跡

気仙沼市街

図 23　町中に乗り上げた船

図 24　川を遡上した船

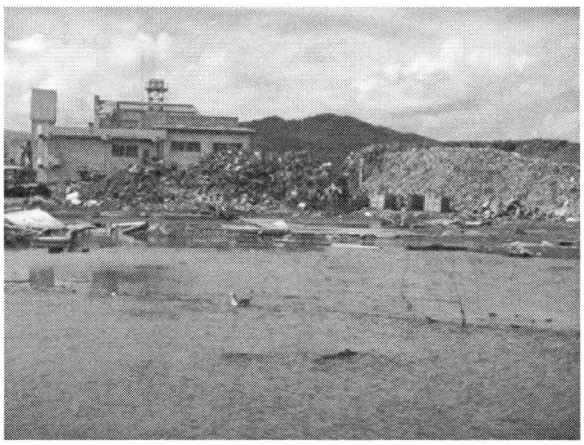

図 25・26　市街のガレキはほとんど手つかずのまま